

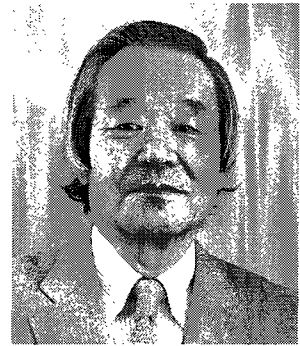
# 私の社会情報学

## 青山学院大学を退職するにあたって

増永良文

### 1. はじめに

私が青山学院大学社会情報学部の設立に関わることになったのは、ある意味偶然であり、ある意味必然であった。2007年3月末日をもってお茶の水女子大学理学部情報科学科教授を停年退職するにあたり、まだ教育と研究に携わっていききたいな、という気持ちの強かった私は、2006年の夏ごろ青山学院大学理工学部情報テクノロジー学科で教員公募を行っていることを知った。迷わず、応募した。幸いにして、最終選考に残り、模擬授業もこなして、選考され、あとは2006年12月に開催された理工学部教授会での投票を待つばかりとなった。ところが、そこで前代未聞の出来事が生じた。私の人事が否決されたのである。聞けば、具体的な記述は取えて控えるが、それぞれの立場と思惑が紡ぎだした結果であった。



しかし、当時の理工学部長であった稲積宏誠教授は違っていた。青山学院大学には新しい学部を設立する構想がある、それを手伝ってほしいと、連絡があった。私はぜひよろしく願います、と返事した。私の専門がデータベースであり、それは社会の写し絵であるとは私の持論だが、稲積先生とは暗黙裡にその認識が共有できていたのかもしれない。稲積理工学部長のお骨折りにより、青山学院大学経済学部教授としての人事が確定したのが、2007年3月末であった。同年4月からは、籍は経済学部であったが、実際は情報科学研究センターの職務を行うということで、相模原キャンパスのB棟の7階に研究室をいただき、社会情報学部設立の一翼を担うこととなった。

### 2. 社会情報学部の設立準備

青山学院大学に設置する新しい学部って、どういう学部ですか？と稲積理工学部長（当時）に何度か尋ねたことがあったが、私には「社会情報学部」であろうという直観があった。当時、福祉も大きな社会的関心と呼んでいたが、青学に福祉学部はなんだかそぐわないような気がしたし、何よりもいま現代社会が求めている学問は、情報という新たな価値のもとで、依然混とんとする現代社会が抱えるさまざまな問題を浮き彫りにし、それらの解決を図るための学問が最優先でしょう、という認識であった。

2007年度は2008年4月開設を目指して持たれた学内会議に出席する一方、文部科学省に提出する「設置届出書」の作成を任せられ、それに没頭した。慣れぬ仕事であったが、肝心なところは、社会情報学をどう捉えるかであった。それによって、設置届出書の文言が違ってくる。この時点での認識は、社会情報学とは社会科学と情報科学の融合である、という極めてシンプルなもので、従って、策定したカリキュラムは、社会科学系、融合系、情報科学系の三本柱となり、それは2012年度のカリキュラム改訂が

なされるまで機能した。

### 3. 社会情報学とは何か

無事、社会情報学部は2008年4月にスタートすることになるが、社会情報学とは一体どのような「学問分野」なのであろうか、その設立に関わった者として、それをきちんと解き明かしてみたいという気持ちは強くなる一方であった。当時ウェブマイニングに関する研究を展開していた筆者は、「集合知」(collective intelligence)の持つ力に大変興味を持っていた。集合知とは知の創成にあたり、一握りの権威よりは「群衆の英知」が下す判断の方が正しい場合が多いと信じる考え方である。社会情報学とは何か、もし、社会情報学が成熟した学問でその道の権威がいるのであれば、彼らは社会情報学とはこういう学問である、とトップダウンにその知識体系 (body of knowledge, BOK) を策定できたであろう。しかし、そのような権威はこの学問分野にはいない。そこで、考えたことが、社会情報学にいささかでも関わっている人々の英知を集めて、集合知として、ボトムアップに社会情報学の知識体系 (Social Informatics BOK, SIBOK) を策定する、というアプローチであった。

この考えを実践するために、2008年度から4年間、青山学院総合研究所研究プロジェクト「社会情報学のための先端情報テクノロジーに基づく知の創成と共有環境の構築」<sup>1</sup>を遂行した。加えて、2010年度から3年間、科学研究費補助金基盤研究 (B)「学際的学問分野の BOK 策定を事例とした知の創成と検証支援システムの研究・開発」<sup>2</sup>を遂行した。ここでは、WikiBOK と名付けた知の構築支援システムを構築し、それを使って2012年の秋になってようやく集合知としての SIBOK の姿を出現させることに成功した。それによると、青山学院大学社会情報学部が2012年度から走らせた新カリキュラムの分析結果に基づく SIBOK は、次に示す11本のエリアから成り立っている。今後のカリキュラム改訂にぜひ役立ててほしい：①人・組織・社会、②地球環境と資源・エネルギー、③ウェブ社会とビジネス、④情報システムとプロジェクトマネジメント、⑤コンピュータ・インターネットテクノロジーと情報社会、⑥データマネジメントと分析、⑦社会情報抽出とハンドリング、⑧社会システム、⑨ウェブテクノロジーと情報社会、⑩意思決定とリスクマネジメント、⑪社会とメディア (順不同)。

集合知については、それは従来の情報化社会に大きな質的変化をもたらすエポックメイキングな考え方と捉えていたから、社会情報学部の学生にもその意義を伝えないといけないと強く考えた。そのための授業を標準履修年次3年の選択科目「情報科学応用 I」で (学年進行に合わせて) 2010年度より開講した。頭の中を整理するには、人に「話してみる」のが一番で、受講した学生が犠牲 (?) になって、それは「ソーシャルコンピューティング」という新しいコンピューティングパラダイムを自分なりに策定できるまで昇華した。そして、その結果が、退職目前の2013年3月には本になる。「ソーシャルコンピューティング入門：新しいコンピューティングパラダイムへの<sup>みちしるべ</sup>道標」(サイエンス社刊、2013年3月刊行予定)である。寡聞にして、国内外で、ソーシャルコンピューティングに真正面から取り組んだ著作を知らない。

### 4. おわりに

はじめにのところで記したように、ひょんなことから、青学・社会情報学部で6年間お世話になった。(理工学部ではなく)「社会情報学部」であったことが私の人生にとっては掛け替えのないほど大きかつ

た。社会情報学って、なんだろうという素朴な疑問に端を発して、病膏肓<sup>やまいこうこう</sup>に入り、これからの社会は「ソーシャルコンピューティング」の時代である、という確信を持つに至った。そして、それを「本」にすることまでできた。この青山学院大学社会情報学部での6年間に感謝してもしきれない。

末筆ながら、青山学院大学社会情報学部が益々発展し続けることを願って止まないし、関係するすべての皆様のご健勝と繁栄を祈り、筆をおく。

- 1 研究代表者：増永良文、研究分担者：稲積宏誠、伊藤一成、宮川裕之、清水康司、飯島泰裕、福田亘孝、宮治裕（敬称略）
- 2 研究代表者：増永良文、研究分担者：正村俊之（東北大）、伊藤守（早大）、長田博泰（札幌学院大）、千葉正喜（札幌学院大）、伊藤一成、高橋徹（中央大）、福田亘孝、石田博之、清水康司、矢吹太郎（千葉工大）、森田武史（敬称略）